東京バッハ合唱団 月報

［第 713 号］2021 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No.713
November 2021

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

「後援会員限定 12 名のための、ご招待演奏会」を終えて

“待ち望みたる 喜びの光”

東京に出されていた、ながい長ーい緊急事態宣言が 9 月 30 日で解除されて、10 月 2 日の土曜日、台風一過の輝かしい秋晴れの下、コンサートが開かれました。終演後の小海牧師の挨拶にあったとおり、まさに“待ち望みたる 喜びの光”(カンタータ第 184 番表題)を、団員も奏者も聴衆（わずか 10 名でしたが）も、みなが一身に浴びた一日でした。

なぜこの時期？ なぜ 12 名？ その答えは、以下の主宰者挨拶文（配布パンフより転載）をお読みください。先月の月報紙上での後援会員への呼びかけに、7, 8 名が申し込んでくださり、さらにメールや電話でお誘いして当日を迎えました。次頁以下に、お聴きくださった方々の感想もご紹介します。

＜本日の特別公演、開催の趣旨＞

本日の上演を、“待ち望みたる 喜びの光”と名づけました。発表機会を失ったカンタータたちと、練習成果の披露の場を奪われたコーラスと器楽アンサンブルのための、“まとめ”の演奏会です。主役は、BWV 113、BWV 93、BWV 78、BWV 184、BWV 211 の 5 曲のカンタータ。はじめの 4 曲はプロテスタント教会の礼拝での上演を前提とした教会カンタータ、BWV 211 はライプツィヒ市内のコーヒーハウスで上演された世俗カンタータです。

昨年の夏、これらの曲目を、都内での教会コンサート（7 月）を皮切りに、信州コンサートツアー（8 月、野尻湖-軽井沢-小布施）で取りあげる計画で、ＡＲＳの有志メンバー、若手の声楽家たちとともに準備を始めましたが、折悪しくコロナ第 2 波の感染拡大に重なり、1 年延期。年が明けて本年、第 120 回定期演奏会（6 月 5 日、川口総合文化センター・リリア音楽ホールを予定）として設定し直し、いつもの常連独唱陣を

■リハーサル風景：画面右の窓側と左の入り口壁面に、12 脚の椅子がならべられた（コントラバスの脇に見える）.（写真：千葉光雄）

＜終了報告＞

特別演奏会：限定 12 名のためのご招待演奏会
“待ち望みたる 喜びの光”

【日時】2021 年 10 月 2 日（土）、午後 3 時 30 分開演
【会場】荻窪教会（日本キリスト教団）
【曲目】J. S. バッハ作曲（日本語上演・大村恵美子訳詞）
●**カンタータ《イェス 高き宝》** BWV 113/1, 8
●**カンタータ《ただ主に依り頼み》** BWV 93/1, 7
●**カンタータ《イェス わが心を》** BWV 78/1, 2, 4, 6, 7
●**カンタータ《待ち望みたる 喜びの光》** BWV 184/5, 6
●**《無伴奏チェロ組曲 第 4 番》** BWV 1010/1, 4, 7
●**珈琲カンタータ《お喋りはやめて お静かに》** BWV 211（全）
【演奏】
・管弦楽：COLLEGIUM ARMONIA SUPERIORE JAPAN（ｺﾚｷﾞｳﾑ･ｱﾙﾓﾆｱ･ｽﾍﾟﾘｵｰﾚ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ、略称 ARS）メンバー
・合唱/斉唱/独唱：東京バッハ合唱団
・鍵盤：田尻明葉 ・指揮：大村恵美子

＜Youtube 配信＞

■限定公開版（ＱＲコード→）
https://youtu.be/w75UIlpBCTA
（当日開会から閉会までの全部通し、来賓挨拶の一部を含む。後援会員・団友・月報読者・団員等、合唱団関係者に向けて編集しました）
■一般公開用（音楽会として、一般バッハファン向き。挨拶等割愛、3 部に分割しました。歌詞字幕付き）
〇Part.1：教会カンタータ https://youtu.be/w75UIlpBCTA
〇Part.2：チェロ独奏 https://youtu.be/hpSwrQ8En-o
〇Part.3：珈琲カンタータ https://youtu.be/vxyRnb_Blyc
■検索「youtube 東京バッハ合唱団」からも、上記にアクセスできます。
youtube.com/c/BachChorTokyo
（ＱＲコード→）

月報 2021 年 11 月号 CONTENTS（増ページ）

・ご感想（諸川春樹/百鳥洋子/山村恵美子）……p. 2-3
・バッハ･カンタータの場景 BWV 21（大村健二）…p. 3-5
・次回公演予告…p. 4 / 《クリオラ》を歌いましょう…p. 5
・連載：退屈するのはいそがしい［8］（大野博人）…p. 6

迎えて、今度こそはと開催を待ちました。が、結果はご存じのとおり、年末年始の第 3 波、6 月本番に向かっての第 4 波と、コロナの猛威の前に中止の決断をせざるを得ませんでした。

私たちは、好きな音楽のためとはいえ、感染に怯えながら、緊急事態宣言の合間を縫っては練習をかさねました。すべての場所で、ソリスト方をはじめ、多くの関係者の方々が開催に向けての準備をなさいました。各地のファンの皆様も、そのつど開演を楽しみにしてくださいました。しかしながら、これらのカンタータたちは、本日をもってお蔵入りとなります。来年の創立 60 周年に向けて、新規の曲目（BWV 21、BWV 1、BWV 147）に取りかからねばならないからです。

時期が時期だけに、当初は、無観客で内輪の仲間のみによる、曲目たちとのお別れのコンサートとするつもりだったのですが、せめて 1 人でも 2 人でも、見届けてくださるお客さまをお招きできないか、と、会場スペース・換気性能・出演人数等の計算から、観客は 12 名まで（後援会員のみ）、という解答を得ました。

第 5 波の渦中、悪環境ではありますが、お見届けいただければ幸いです。

（東京バッハ合唱団・大村恵美子）

＜ご来聴の後援会員のおたより＞

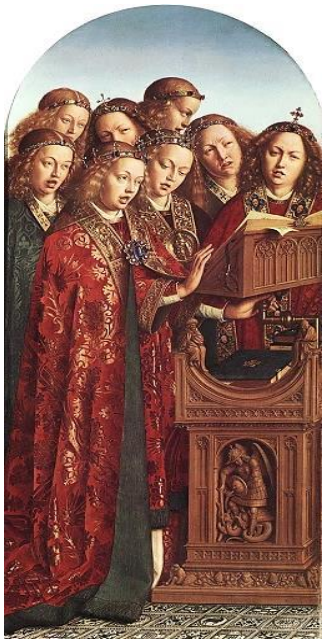
間近での演奏、心の中は涙ぼろぼろ状態

諸川 春樹（後援会員）

先日はコンサートに招待される特別な 12 名の中に入れていただき、ありがとうございました。ご招待されてから、はて、なぜ 12 名なのでしょうかと思うようになりました。12 という数字は 3×4 で、3 も 4 も貴重な数字ですし、また 12 使徒や 12 の族長などそれ自体が意味のあるものでしたので、ちょっと興味が湧いたのです［*下欄の形而下的な解を参照］。

さてこれまで、こんな間近で演奏を聴くことなど一度もなかった私が、今回のコンサートで特別席に腰を下ろし、合唱と演奏に包まれたことは、まさに「天にも昇る」経験だったといってよいでしょう。心の中は涙ぼろぼろ状態で、感動という文字だけでは表せない体験でした。とりわけ目の前で演奏されていた若者［チェロ独奏：椿 周（あまね）さん（高 2）］の弦の使い方には驚嘆するばかり。それに合わせて手で膝を打つという白木先生［創立以来の後援会員・洋画家、2019 年歿］のポーズを、今度は私が自然と繰り返しておりました。

*）12 名の根拠：
礼拝堂の収容数最大が 100 名。コロナ禍なので 50%、したがって 50 名が当日のキャパシティ。コーラス 27 名、器楽アンサンブル 8 名、オルガン、指揮者、録画担当各 1 名、で計 38 名。50－38＝12 名……これが、お招きできる観客の総数でした。



■ファン・エイク「合唱の天使」（上は部分）．オランダ・ゲント祭壇画（1432 年）

コンサート終了後にこの感動をお伝えしようと思っていたのですが、そもそも言葉にすること自体、野暮なことかもしれません。コロナ禍との付き合い方にある程度の見通しが立った現在、バッハ合唱団が再び演奏活動を開始されたことは私たちファンだけではなく、その周囲の人たちにまで「生きる喜び」が広がることにつながるにちがいないと確信しています。来年 5 月 14 日の公演も楽しみにしております。取り急ぎ、一言、御礼まで。

P.S. 手近なところに合唱を描いたファン・エイクの画像がありましたのでお送りします［上掲］。ご存じだと思いますが、私にはこの女性たちの表現がなんとも好ましいです。

［筆者は、多摩美術大学の西洋美術史の先生］

いつもと変わらぬバッハ合唱団

百鳥 洋子（後援会員・元団員）

後援会員招待の特別コンサートにお招きいただきありがとうございました。

緊急事態宣言解除後、間も無く、久しぶりに生のバッハの音楽を聴かせていただける機会に与り、意気揚々と浮かれ気分で出かけていきました。そんな軽々しい自分を後から恥ずかしく思うことになるのですが。

いつもと変わらぬ荻窪教会、いつもと変わらぬ懐かしいお顔、いつもと変わらぬお元気な大村先生、いつもと変わらぬバッハ合唱団がそこにありました。皆様のお顔を拝見しうれしさが込み上げてきました。けれどあたりまえの日常があたりまえでないように、あたりまえの合唱団があたりまえではなく、いかにすごいことかをひしひしと感じることになりました。

コロナ禍のなか、先生はじめ団員の皆様は絶え間ない努力を積み重ね準備をしてこられ、この日のコンサートを迎えられたことを思うと頭が下がる思いでした。まさに「待ち望みたる喜びの光」だと感じました。すべてに感動致しました。ソリストの室田さんご夫妻［S：娘リースヘン役、B：父シュレンドリアン役］がお上手なのは前から存じておりましたが、奈良昴さん［T：語り手］の声の美しさにも心を打たれました。独奏チェロの響きはよどみなく冴えわたり、生の器楽の

◆上演用歌詞対訳は，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

演奏を間近で聴くことができてほんとうに贅沢な時間でした。さらに珈琲カンタータは日本語初演とのことで、歴史的瞬間に立ち合わせていただけてとても光栄なことでした。

懐かしい団員の皆様とあまりお話しできず、感動と感謝を伝えられなかったことが少々心残りでした。千葉さんには月報でいつも美しい写真を載せて下さっていて、清々しく癒される思いでいることをお伝えしそびれてしまいました。お伝え下さると有難いです。いつもコンサートのパンフレット、栞の挿画、文章など、興味深く拝見しています。終演後の田中克彦先生［団友］のお話しはさすがです。

とりとめなくなってしまいましたが、とにもかくにもコンサートはとても楽しかったです。

南相馬で「憂きにありても 主なるイェスはわが喜び」という歌詞を覚えたことを思い出しました［モテット《イェスよろこび》BWV 227 終曲コラール］。まさに今憂きにあるかもしれませんが、今回のコンサートは私にとって大きな喜びとなりました。ほんとうにありがとうございました。

それでは来年の創立 60 周年に向けて、みなさま、ますますお元気でご活躍下さいませ。楽しみにしております。

演奏を聴いて思ったこと、３つ

山村 恵美子（後援会員、荻窪教会員）

大村先生、2 日の日は，長いこと演奏会を開けなかったにも拘わらず素晴らしい演奏をお聞かせ下さり、ありがとうございました。

演奏直後に思ったことは 3 つあり、

①荻窪教会でのこれまでの演奏会では、狭いスペースに団員が並び、4 倍位のスペースを聴衆が占領しており、申し訳なく感じておりましたが、コロナ禍が及ぼすプラス面として、あのように多少は余裕をもって合唱団が配置できたこと。

②カンタータ《待ち望みたる喜びの光》を聞きながら涙が出そうになりました。大部分の人が分かたれ続けている教会関係の人々を、主はお見捨てになることなく、共に集える時を与えて下さり、前進できる勇気を与えられたこと。

③《珈琲カンタータ》の歌詞には猫のことがでてきますが，昨今の日本は犬猫ブームですので、この曲は一般の方々の受けがいいと思いました。

さて、本日［10 月 4 日］は、10 月号の「月報」をお送り下さりありがとうございました。別紙の「シューベルトの青春、バッハの全人性」を拝見しながら、大村先生がいつまでもお若い理由がこれでも分かりました。

［既刊楽譜］作曲アイディアの素材から見渡してみる

バッハ･カンタータの場景 № 6

大村 健二（団員）

創立 60 周年記念公演の曲目（1）

- **BWV 21《われは 憂いに沈みぬ》** 三位一体節第 3 日曜日
- **BWV 1《あしたに輝く たえなる星よ》** マリアの受胎告知の祝日
- **BWV 147《心と日々のわざもて》** マリアのエリサベト訪問の祝日

これまでに出版した日本語版楽譜、既刊全 81 曲を改めて紹介しながら、在庫の販売にもつなげようとする企図の連載を、この春から始めています。

教会暦の「復活節」およびその後続の主日のための作品を 6 曲（BWV 4, 6, 42, 67, 104, 166）取りあげたところで夏を迎え、暦が「三位一体節」に入るので、近づく小布施公演（8 月 7 日に予定していた！）の演目の 3 曲（BWV 78, 93, 113）が、この時節の「前半」に該当するのをさいわい、プログラム紹介を兼ねて書いておくことにしたのでした（月報 2021 年 4 月号～8 月号）。

その後、コロナの波の襲来で公演中止となり、先日の荻窪教会での小さな“まとめ”のコンサート（10 月 2 日、後援会員のみ限定 12 名招待）に姿を変えた経緯は、当月報の冒頭にお伝えしたとおりです。

この間、月報は多くの原稿に恵まれたため、この連載を休んでおりましたが、合唱団の内外ともに、話題が先へ進んで、来年の創立 60 周年に向かっていますので、このシリーズもその辺から歩みを進めることにします。

その記念公演（第 121 回定期演奏会）は、2022 年 5 月 14 日と決まりました（**次ページ＜次回公演予告＞参照**）。演目は冒頭に掲げた 3 曲です。並べた順に当日のプログラムを構成しますので、紹介もこれに準じます。選曲は、団員の希望投票をもとにして主宰者が決めました。団員のみなさんにも主宰者にも、多くの思いがあったことでしょうが、出来あがった結果は、60 周年＝還暦を記念する見事な組み合わせとなったと思います。

この順が、前回までの「三位一体節・前半」をひきつぐことになったのは、“たまたま”です。すでに取りあげた 3 曲がバッハのライプツィヒ就任 2 年目の三位一体節後第 5，11，14 日曜日（1724 年 7 月から 9 月）のための作品群だったのに対し、ここで紹介する BWV 21 は、就任初年（1723 年）の三位一体節後第 3 日曜日（この年は 6 月 13 日）のための曲です。前任地ケーテンから、5 月 22 日に家族ともども引っ越してきて、わずか 3 週間という慌ただしい時期でした。ただし、“たまたま”はここまでで、他の 2 曲は「三位一体」（「父・子・聖霊」を離れて、「母」マリアの聖日を記念する礼

拝のための 2 曲が、（たまたま）並びました。

という具合に、教会暦的には脈絡のないプログラムですが、これら大曲を 3 曲まとめて眺めると、BWV 21 は「青年時代のカンタータ創作の総決算というべき壮大な記念碑」（A. デュル）； BWV 1 は、バッハ作品番号の劈頭へ還暦して、暁けの明星の輝き； BWV 147 は、世界中のバッハファンに愛される馴染のコラール（「主よ、人の望みの喜びよ」）を擁し、これも青年期の原曲に発するバッハ・カンタータの表看板。3 曲集めて創立 60 周年を祝うに最適な選曲となりました。

■カンタータ第 21 番《われは 憂いに沈みぬ》

Ich hatte viel Bekümmernis BWV 21

この作品は、3 相のテクスト（歌詞）から成っています。登場の順に挙げると、まず旧新約の聖書から（第 2、6、9 曲は「詩編」。第 11 曲は「黙示録」）、つづいて台本作者 S. フランクの創作詞（第 3、4、5、7、8、10 曲）、後半にいたって G. ノイマルクのコラールが 2 節（第 9 曲への組み込み、旋律も）。この全体の構成には、もちろん作曲者バッハの主導的な役割があったはずです。このノイマルク、フランク、バッハの組み合わせは、ヴァイマルの宮廷に因むものですが、この魅力的なトリオの協演に触れる前に、デュルのいう「壮大な記念碑」の高みと規模とを生み出したであろう聖書に注目しておきましょう。

［教会暦］三位一体節後第 3 日曜日（他に BWV 135）
［使徒書］ Ⅰペト 5, 6-11（すべての思い煩いを神に投げ出しなさい）
［福音書］ルカ 15, 1 - 10（はぐれた羊、無くした銀貨の譬え）
［成立/改編］＜M. ペッツォルト説（BJ1993）による＞
・原曲初演（ヴァイマル時代）：1713 年 10 月 8 日（シュヴァルツブルク=ルードルシュタットの前宰相 A. フリッチュ夫人 A. M. ハレスの追悼礼拝。於・ヴァイマル聖ペトロ・パウロ市教会）。現行の第 2-6、9 曲に当たる。
・拡大再演：1714 年の三位一体節後第 3 日曜日（6 月 17 日）のために拡大されて改作・再演。この日は病気療養のためフランクフルト A/M に赴くヨーハン・エルンスト公子の送別も兼ねた？（独唱 S→T）。
・再演（ケーテン時代）：1720 年秋、ハンブルク聖ヤコービ教会のオルガニスト採用試験に際し再演（独唱 T→S にもどる。調性 c-moll→d-moll）
・ライプツィヒ再演：1723 年の三位一体節後第 3 日曜日（6 月 13 日、着任後第 3 作）、金管を強化、ST 両独唱、調性 c-moll。この稿が現存、今日の演奏譜の基礎。
［歌詞］台本 S. フランク。2）詩編 94, 19。6）同 42, 12。9）同 116, 7 および G. ノイマルク〈ただ主に拠り頼み〉Wer nur den lieben Gott läßt walten（1657）【BCH-142】第 2, 5 節。11）黙示録 5, 12-13。
［上演用訳詞］大村恵美子 http://bachsmusik.starfree.jp/bwv021.htm
［編成］独唱 STB、合唱、トランペット 3、トロンボーン 4、ティンパニ、オーボエ、ファゴット、弦合奏、通奏低音。

［楽曲構成］	訳詞冒頭句/原詞冒頭句	編成（略語）/調
第 1 部		
1. シンフォニア	—	ob、str、bc ハ短調
2. 合唱	われは 憂いに沈みぬ *Ich hatte viel Bekümmernis in meinem Herzen*	ob, fg, str, bc ハ短-ヘ短-ハ短
3. アリア（S）	歎きと涙 憂い 悩み Seufzer, Tränen, Kummer, Not	ob, bc ハ短調
4. レチタティーヴォ（T）	なにゆえ主よ 悩みのこの時 Wie hast du dich, mein Gott	str, bc
5. アリア（T）	涙の小川よ 絶ゆることなし Bäche von gesalznen Zähren	str, bc ヘ短調
6. 合唱	うなだるるか わが魂 *Was betrübst du dich, meine Seele*	ob, fg, str, bc ヘ短-変ホ長-ハ短
第 2 部		
7. レチタティーヴォ（S/B）	ああイエス憩い/ おお我はながもとに Ach Jesu, meine Ruh/ O Seele sieh!	str, bc
8. 二重唱（S/B）	わがイエス 癒したまえ/ われ来たり Komm, mein Jesu/ Ja, ich komme	bc 変ホ長調
9. 合唱（コラール付き）	安きに戻れ 今や心よ/痛き憂い悩み *Sei nun wieder zufrieden, meine Seele*	tb4, ob, str、bc ト短調
10. アリア（T）	喜べ いま わが心よ Erfreue dich, Seele, erfreue dich, Herze	bc ヘ長調
11. 合唱	神の小羊に ふさわしきは力 *Das Lamm, das erwürget ist*	tp3,tm,ob,fg,str,bc ハ長調
		（演奏時間 40 分）

［上演履歴］1974（横浜指路教会 100 年）、1981（#49）、1997（#81, Ⅲ独）、2022（#121）予定
［日本語版楽譜発行］2000 年「50 曲選」、ISBN978-4-925234-09-9（¥1900）
［録音］CD「50 曲選」Vol. 3（1997 年録音、#81）

＜次回公演予告＞

第 121 回定期演奏会（創立 60 周年記念公演Ⅰ）

［日時］2022 年 5 月 14 日（土）
［会場］杉並公会堂大ホール（東京・荻窪）

［曲目］J. S バッハ作曲（日本語上演・大村恵美子訳詞）
●カンタータ第 21 番《われは憂いに沈みぬ》BWV 21
●カンタータ第 1 番《あしたに輝く たえなる星よ》BWV 1
●カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》BWV 147
［演奏］
・独唱：光野孝子（S）、谷地畝晶子（A）
鏡 貴之（T）、山本悠尋（B）
・管弦楽：COLLEGIUM ARMONIA SUPERIORE JAPAN
（ｺﾚｷﾞｳﾑ･ｱﾙﾓﾆｱ･ｽﾍﾟﾘｵｰﾚ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ、略称 ARS）
・合唱：東京バッハ合唱団 ・指揮：大村恵美子
［チケット情報］その他詳細、2022 年 1 月に発表予定

＜団員募集＞
合唱参加者、SATB 各声部若干名
詳細はＨＰをご参照ください。http://bachchor-tokyo.jp/

○詩編と黙示録

現代語訳の日本語聖書の引用では、ルター訳ドイツ語の力強さが伝えられませんので、大村恵美子の上演用訳詞をそのまま載せます。この 4 曲が第 21 番の屋台骨になります。

われは憂いに沈みぬ 重荷負いて
されど慰めは わが魂を癒したもう
「詩編」94, 19（**第 2 曲**：合唱）
うなだるるか わが魂 惑い・怖れ満ち
仰ぎ見よ 主を 主になお謝しまつらん
そはわが救い わがみ神なれば
「詩編」42, 12（**第 6 曲**：合唱）
安きにもどれ 今や心よ 主の恵みに
「詩編」116, 7（**第 9 曲**：合唱）
神の小羊に ふさわしきは力
富と知恵と強きと栄光と誉れ・讃美
み栄え・誉れ・力あれやとわに わがみ神に
アーメン アレルヤ
「黙示録」5, 12-13（**第 11 曲**：合唱）

通してお読みいただければ、この大曲の全体像がおのずと見えてくるはずです。

以前には私は、この日の指定聖句（使徒書・福音書、データ欄）から内容を具象化することができなかったのですが、今回、あらためて、上の引用箇所をまとめて読み込んでみると、この日の福音書（ルカ 15, 1-10）では、実は「見失った一匹」を見出した“牧者”の喜びにではなく、はぐれてしまった“羊”の不安と恐怖、あるいは見出された“羊”の喜びと平安とに、むしろ焦点を当てるべきであったと気づいたのでした。

われわれ一人ひとりの心労・憂愁を、迷える羊の心細さに仮託して、救いを牧者＝神に求める、という構図をいったん離れ、思いきって、冒頭合唱の出だし「われは憂いに沈みぬ」の主語を「羊」に置きかえてみます。ここに立って、はじめて台本作者（フランク）と作曲者（バッハ）との協働の意図に出会えたように思います。あとは、これらの「詩編」の周辺にちりばめられたアリアやレチタティーヴォの歌い語る内容（とくに、後半、第 7, 8 曲の魂とイエスとの雅歌的世界の対話）が、きわめて自然に聴く者の心に落ち着くでしょう。この曲の出だし〈わ・れ・は〉は、休符をあいだに挟んで 3 つの音符に等分に置かれ（原詞では〈ich, ich, ich〉と ich が 3 回繰り返され、当時これが物議をかもしたことが伝えられています）、この喘ぎのなかに、迷える羊の叫びが聞こえてきます。

〇詩人・台本作者フランク

1708年、23歳のバッハがオルガニスト兼宮廷音楽家として、二度目のヴァイマル宮廷務めを始めたとき、同宮廷の聖職会議書記の職にあったのが詩人のザーロモ・フランク（1659-1725）でした。ノイマイスターに倣った新様式で、一世代若いバッハに、この 60 周年の記念演奏に取りあげようとしている 3 曲のうち、当作品（BWV 21）ともう 1 曲 BWV 147（次号で扱う予定）を含む、20 曲のカンタータに詞を提供しています。ほとんどがバッハのヴァイマル期に初演されており、われわれの 2 曲も、その原曲はヴァイマル宮廷の礼拝用作曲に遡ります。

〇コラール作者・作曲家ノイマルク

さらに上の世代のゲオルク・ノイマルク（1621-81）は、ヴァイマル公ヨーハン・エルンスト 2 世（在位：1662-83）の司書をつとめた詩人・作曲家で、バッハが 18 歳で初めて宮廷楽師として仕えたとき（1703、同 3 世の代）には、すでに世を去っていましたが、このシリーズをお読みくださっている方々にはお馴染みの（6 月号で BWV 116 の旋律、7 月号で BWV 93 の歌詞と旋律について触れた）、コラールの名曲「ただ主に拠り頼み（Wer nur den lieben Gott läßt walten）」の残響とともに詩人の記憶も語り伝えられていたものと想像されます。旋律の借用も含めると、名曲ばかり 8 曲のバッハ作品に登場し、彼の偏愛のほどが知られます。

以上のとおり、この第 21 番のカンタータは、ヴァイマル宮廷の宗教文化の粋を今に伝えていると言えましょう。ぜひともじっくりと歌詞を味わいながら、聞き込んでいただきたいところですが、残念ながらテクストの全文を掲載するわけには行きませんので、ホームページの上演用対訳ページでご参照ください。

データ欄に見るとおり、なんどかの改編・拡大を経て伝えられた 2 部構成の大曲です。音楽に触れる余裕がなくなりましたが、一つだけ、第 9 曲の 200 小節を越える大合唱について。フーガ風 4 声部合唱〈安きにもどれ 今や心よ〉と前出ノイマルクのコラール（第 2 節・第 5 節）とを組み合わせた楽曲は、またソロ部分と合唱部分との交替による音色・音量の変化も聴きどころですが、弦楽声部を補強するトロンボーン（4 声部・4 本！）の登場も（見た目も）見どころです。当合唱団では、この 4 本を含めた指定どおりの編成は、来年が初めての上演経験になるはずです。乞う、ご期待。

＜お誘い＞

Let's sing CHRISTMAS ORATORIO together!!

《クリスマス・オラトリオ》を、みんなで歌いましょう

（創立 60 周年前夜祭、忘年会）

●12 月 18 日（土）、14 時～16 時

●荻窪教会（日本キリスト教団、荻窪駅南口 8 分）

＊

ＯＧ/ＯＢのみなさま!!　ご常連のみなさま!!

後援会/団友のみなさま!!

歌った覚えのある方（ドイツ語/英語を問わず）、

楽器での演奏経験のある方!!

お友達の、そのまたお友達もお誘いあわせで、

なにはともあれ、《クリオラ》、歌ってみませんか？

聴く専門の方も歓迎です。

＊

・今回は、前半Ⅰ～Ⅲ部の合唱部分のみ。はじめの 1 時間は練習をします。声（楽器）と楽譜を持ちよって、仕上げてみましょう。（11 月中より、団の通常練習でも取り上げる予定。参加歓迎、気軽に合流ください）

・来年、合唱団は創立 60 周年を迎えます。その前夜祭、そしていろいろあった年の忘年会（飲み食いはありませんが）をも兼ねさせていただき、みなさまとご一緒できれば幸いです。

＊

●器楽：ｺﾚｷﾞｳﾑ･ｱﾙﾓﾆｱ･ｽﾍﾟﾘｵｰﾚ･ｼﾞｬﾊﾟﾝ(ARS)有志（予定）

●オルガン：田尻明葉

●指導と指揮：大村恵美子

＊

●参加無料（事前の申し込みが必要）

（お名前とご連絡先を登録させていただきます。コロナの状況によっては、変更・中止もあり得ますことをお含みおきください）

●楽譜：ベーレンライター版をお奨めします。

（お持ちでない方は、事務局までお申し込みください。日本語訳詞つき自家使用版をお譲りします。本体 2500 円＋送料 100 円）

お申し込み/お問い合わせ

メール office@bachchor-tokyo.jp　　電話 03-3290-5731

（東京バッハ合唱団事務局）

◆月報バックナンバーは，当団ＨＰからご覧いただけます．
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

＜連載随想＞ 退屈するのはいそがしい［9］

元に戻る？

安曇野閑人 **大野 博人**

「へび 長すぎる」

ルナールの傑作「博物誌」に出てくる「へび」の項は簡にして要をえている。初めて読んだ文庫本には、「『長すぎる』という文が短すぎるところがおもしろい」という注がついていた。なるほど。

これを思い出したのは、先日、数ヶ月ぶりに上京したときに、似たようなフレーズが頭に浮かんだからだ。

「東京 大きすぎる」

1 泊だけの滞在でいくつかの用件をさっさとすませようと、地下鉄を乗り継ぎ、銀座や日比谷、新宿などを動き回っていると 2 日とも歩数が 1 万歩を超えた。（安曇野では1日に1万歩を超えることはあまりない。田舎で畑仕事に出るよりも、東京で地下鉄の階段を上がり下りしたり、ビルのなかを右往左往したりした方が、運動量が多い。東京は健康にいい街なのかしら？）

その大きすぎる東京の街ではたくさんの人が早足に行き交っていた。駅などの人出も多い。かつて見なれた東京の光景。コロナ禍が下火になって、生活が元に戻ってきつつあるということだろうか。

元に戻る？ そこが私には不思議だった。

1 年半にも及ぶ自粛生活は、それまでの日常を大きく変えた。マスク、消毒、手洗い、大人数での宴会やイベントの中止（五輪は強行したけれど）。とりわけ、仕事の風景はかなり変容した。多くの職場がネット上に移った。朝、自宅や近所のシェアオフィスでパソコンを開いて業務をこなす。オンラインで連絡を取り合い、会議をする。

通勤ラッシュも、だらだらと長引く会議も、義理で出かける飲み会もなくなった。そのかわりに家族とすごし、趣味に使う時間が増えた。朝早く出勤し、帰宅が真夜中だった会社員でも、平日の夜にバッハの長い曲にゆっくりと耳を傾けることができるようになる。

新型コロナウィルスはうっとうしいけれど、人々が新しい働き方になじめば、異様に大きな東京がまっとうな規模に落ち着くきっかけになるかもしれないと思っていた。

■戻りつつある人出．新宿にて

3 年ほど前、テレワークの取材をしたことがある。仕事と休暇の境目をなくすようなワーケーションという試みについても調べた。まだ、一部の会社で実験的に始まったくらいで、記事にはどちらについてもことばの説明から書かなければならないころだった。

そこへコロナ禍。流れは一気に加速するのか？

たしかに同じ現場に集まったり、人と直接会ったりしなければなり立たない仕事はたくさんある。他方、一人で集中して仕上げる方がいい仕事も少なくない。毎日、出勤しなくてもいい人が増えれば、ラッシュは解消される。そんな人は勤務先から遠くに住んでもあまり不便を感じなくなるだろう。都心から離れた少し広い住まいを選ぶこともできる。

取材した人たちも、新しい傾向にちょっとわくわくした様子だった。

「大きな本社は無用の長物になる」

「地方に移るのは都落ち、という認識はもう時代錯誤だ」

「飲み会だって、オンラインでできる」

長野県に自宅を持った霞ヶ関の若い官僚がいた。月曜から金曜まで都内のウィークリーマンションのようなところから出勤し、週末は自宅に帰っているという。

「中央官庁の官僚だって、日本のあちこちに暮らしていた方が日本の課題の理解も深まると思いますよ」と話していた。彼の部署ではテレワークも少しずつ増やしていた。「いずれ東京に来る日数をもっと減らせると思います」

その一方で、職場から距離を置くことに不安を抱く人の話も聞いた。自分がいないところで、だいじなことが進んで置いてきぼりになるかもしれない、目の前にいない部下はちゃんと働いているのだろうか、上司は自宅で働く自分の仕事ぶりをちゃんと見ているだろうか……。

「仲間といっしょにいないと不安を感じる人はけっこう多いのかも」と首都圏に住む友人は言う。都会人って孤独を愛する個人主義者ではなかったのかしら。それとも東京は、大きくなりすぎたムラ社会？

元に戻ろうか、別の道に進もうか。久しぶりの東京は迷っているように見えた。

（団友・後援会員、元朝日新聞記者。写真も筆者）

【編集後記】

・「限定 12 名のためのご招待コンサート“待ち望みたる喜びの光”」という長すぎる題名の音楽会で因縁の 5 曲のカンタータとのお別れを果たし、今は、60 周年記念公演（来年 5 月）のための練習にとりかかっています。

・＜世界が日常を取り戻す日は、いつになるでしょう。
　劇場が非日常を取り戻す日は、いつになるでしょう＞――平田オリザ「それでも演劇の灯は消えない」（「但馬日記」第 29 回、『世界』2021 年 10 月号）

・いろいろあった 1 年でしたので、60 周年の前夜祭と忘年会を兼ねて、《クリスマス・オラトリオ》を歌う会。なにはともあれ、楽譜をもってご参集ください（p. 5）。

・多くの原稿に恵まれ、増ページとなりました。多謝。